

キャンプ研究


第17巻

2014年3月発行

Japan
Journal of
Camping
Study

Vol.17

Mar. 2014



人と自然との調和を目指す
私たちはオガワテクノです

株式会社オガワテクノ

<http://www.ogawa-techno.jp>

東京支店	〒135-0031	東京都江東区佐賀1-5-4 アーバン佐賀ビル4階	TEL 03-3641-7123
本社・江刺工場	〒023-1131	岩手県奥州市江刺区愛宕字西下川原240-1	TEL 0197-35-4161
胆沢工場	〒023-0402	岩手県奥州市胆沢区小山字中油地137	TEL 0197-47-1496

キャンプ研究

第 17 卷 2014 年 3 月 10 日発行

目次

研究論文

- 雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究…………… 3
春日 規克・三原 幹生・加藤 玲香

実践報告

- 南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性…………… 15
佐藤 冬果・渡邊 仁・向後 佑香
父子キャンプ（パパチルキャンプ）の実践…………… 23
石井 勝
「災害に備える」野外力をきたえよう…………… 29
アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題
松前 雅明

資料

- 「キャンプ研究」投稿規程…………… 37
「キャンプ研究」収録題目一覧…………… 40
日本キャンプ会議発表題目一覧…………… 43

編集後記

キャンプ研究 第17巻PDFについて

本PDFの内容について、ページ単位での印刷は可能ですが、テキスト及び画像のコピーはできない設定としておりますので、ご了承ください。転載等を希望される場合は、日本キャンプ協会にお問い合わせいただきますよう、よろしくお願いいたします。

また、この冊子は販売もしておりますので、購入を希望される方は、日本キャンプ協会にお申し込み下さい。

お問い合わせ先

公益社団法人日本キャンプ協会

電話：03-3469-0217 メール：ncaj@camping.or.jp

©公益社団法人日本キャンプ協会

研究論文

雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

A study on the environment of the snow igloo in the winter camp

春日規克 (愛知教育大学)・三原幹生 (愛知教育大学)

加藤玲香 (愛知教育大学)

Norikatsu KASUGA・Mikio MIHARA・Reika KATO

The present study examined the sleep environment of a snow igloo night in winter outdoor activities by the questionnaire method. The survey was carried out on 32 students (16 males and 16 females) who attended the practice field for the first time. The students were divided into 4-5 people teams for the igloo construction and the igloo night. The floor space inside the igloo had a large enough area to sleep 5 people alternating head and feet, and the height of the inside of the igloo was from 80 to 140cm. Mats for sufficient insulation were laid on top of the snow surface in the igloo (thickness of the aluminum foil mats: 1mm+10mm +10mm). Students used the sleeping bags provided which were designed for a temperature range down to -15 °C .

The results were as follows: 1) There was no answer of "I felt the intense cold" to the question "Did you feel the cold in the igloo" and three female students responded that "it was cold". 2) 26 students responded "did not care" or "warm". 3) However, three students responded that "they felt the heat and humidity." 4) The three students who answered "it was cold" managed a sleep time of 5 hours. On the other hand, 5) Short sleep time students tended to feel stressed by the narrowness of the igloo. 6) Half of the students felt the narrowness of the igloo even in those with a sleep time of more than 4 hours. 6) There was no relationship between the cold and height of the inside of the igloo.

These results suggested that it is not so important to consider the height of the inside of the igloo with regard to cold prevention. In order to achieve a more comfortable sleep it would be important to construct a more sufficiently spacious igloo.

キーワード：冬季野外活動、イグルー泊、寒さ、狭さ

Keywords : Winter outdoor activities, Igloo night, Feeling cold, Stress confined spaces

1. 諸言

ツンドラ地帯にて狩猟を生活の糧としていたカナダ・アメリカのイヌイト民族は、圧雪ブロックを利用した半球状の簡易住居（イグルー）をつくり、移動生活を行っていた¹⁾。イグルーは、-50～-60℃に低下する北極圏の厳冬の外気からも身を守ることができる機能的に優れた一時の住まいである²⁾。日本では北海道・樺太に定住していたアイヌ民族や東北地方のマタギ達は、夏季

のうちに木や草、蔓、樹皮などの材料による仮の住居を建て冬の狩りの際などに使用していたが^{4,12)}、雪を用いた住居づくりが定着していた記録はない。日本では雪洞として秋田や新潟地方に伝わる「かまくら」が知られているが、これは神事・祭礼あるいは行事として普及したものである³⁾。

最近では、冬季の野外活動にイグルー作りイグルー泊を取り入れる試みが多くみられる。イグルー製作は技術的困難性もあり、指導者の関与が

重要となるが、キャンパー同志の協力や連携、工夫が必要な活動である。また、作業時間としては午後の3～4時間で完成にこぎ着ける事ができる、野外実習においては適当な作業量をとまなう活動と考えられる。また、「衣・食・住」という、生活の基盤を振り返ることも求められる野外教育の中では、短期間に野外にあるものから「衣」を作り上げる事も、「食」を確保する事も困難であるのに対して、イグルー製作は自然環境の中から「住」を作り上げ、実際に宿泊という生活の一部の活動に利用することができる、達成型・完結型の醍醐味のある活動と言えよう。しかし、初めて冬季のキャンプ活動に参加するキャンパーにとっては、雪の中での宿泊に対して、特に、寒さに対する恐怖感を持つことは十分考えられる。キャンパーがイグルー泊に恐怖を感じるとともに、それを企画する指導者にとっても安全に対する不安が付きまとう活動でもある。イグルー泊は寒い環境でなくてはできない活動であるが、その活動を行う屋外環境は、凍瘡、凍傷、凍死などの危険性が予測される低温条件である。宿泊に耐えるだけの十分な防寒用具や事前の指導を行い危険回避に努めたとしても、正確に宿泊環境を理解することは大切である。また、さまざまな感情を持つキャンパーのイグルー泊に対する感想を聞きとり、問題点の把握と改善を計り、初めての試みに挑戦するキャンパーに安心を与える努力が必要と考える。

そこで本研究では、イグルー泊に初参加するキャンパーに対して、宿泊環境について実態調査をアンケート方式により調べ、イグルー泊の安全性について検討した。

2. 方法

本調査は、平成24年2月中旬からのA国立大学、および同年3月上旬のY国立大学の選択科目・野外実習を受講した学生を対象に実施した。受講学生の人数は男女各16名、計32名であった。実習の実施場所は、いずれも長野県小谷村榑池高原（標高900m）であり、受講学生に対しては、イグルー製作法、当地の昼夜の外気温環境、イグルー内の温度、重ね着による防寒効果や調査の主旨などを説明した。また、イグルー泊への参加は自由意思とした。当日の着衣については、す

べて学生の任意とした。野外実習はいずれの大学とも4泊5日の日程で行われ、2日目の午後1時半からイグルー作りを開始し、午後5時半までに完成した。イグルー作りと宿泊は4から5名/班とした活動であり、イグルー作りの際の床面積は5名が頭と足を交互にして寝られる広さになるよう指導した。また、入り口は床面積より40cm掘り下げた高さにて、縦横約80cm×80cm程度の大きさとした（図1）。

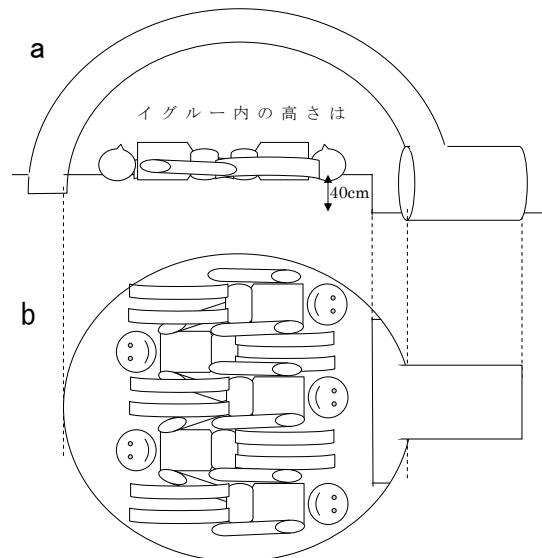


図1 イグルーの断面図(a)と平面図(b)

イグルー製作後は、一旦室内にて夕食・休憩をとり、この間に防寒着を十分乾燥させた。午後8時半よりに宿泊準備のための説明と防寒用具の配布を行った。イグルー内には雪面の上にブルーシートで床面全部を覆い、その上に1mm厚の銀シート、さらに10mm厚ロールマットを重ねた。その上に広げた封筒型シュラフを敷き、もう一枚の10mm厚ロールマットを重ねた。マミー型寝袋はM社製#02（快適睡眠温度域0℃、使用可能温度域-15℃）を使用した。その他として、携帯用のカイロを学生の希望する個数を配布した。また、イグルー内の寝る位置においては、両サイドにて寝る者はシート越しにはあるが雪壁面に身体が接するため、寒さを感じる事が多い。これを防ぐため、湧かしたお湯を入れた湯たんぽを1つずつ両サイドに寝る者に貸与した。キャンパーは午後10時にイグルーに移動開始し、直ちにイグルー内での防寒用具を敷き詰め就

表1 アンケート質問内容一覧

雪上キャンプにおけるイグルー泊に関してのアンケート

()班 ()名/班 寝た位置右から()番 氏名() (男・女)

次の質問について、各回答欄の当てはまる項目に○をつけ、()内に記述してください。

ア. イグルー内の寒さに関する質問

① すごく寒かった ② 寒かった ③ 気にならなかった ④ 暖かかった ⑤ 蒸し暑かった

イ. 寒さを感じることで眠れなかったですか

① ほとんど眠れない ② すこし眠れた ③ まあ眠れた ④ 眠れた ⑤ いつもと同じよう
(睡眠時間 0-1 時間) (1-2 時間) (2-4 時間) (4-6 時間) に眠れた (6 時間以上)

ウ. 身体の一部に冷たさ寒さを感じた箇所はありますか。① はい(部位と数) ② いいえ

エ. 雪洞内の狭さを感じましたか?

① 強烈に感じた ② 感じた ③ 気になかったが慣れた ④ 気にならない ⑤ 広いと感じた

オ. 狭さを感じることで眠れなかったですか

① ほとんど眠れない ② すこし眠れた ③ まあ眠れた ④ 眠れた ⑤ いつもと同じよう
(睡眠時間 0-1 時間) (1-2 時間) (2-4 時間) (4-6 時間) に眠れた (6 時間以上)

カ. 寒さや狭さ以外に、眠れなかった理由はありますか。(例 トイレ, 不安, 話し声など)

① はい(理由,) ② いいえ

キ. 寝袋のチャックはどこまで上げて寝ましたか

① 膝 ② 腰 ③ 胸 ④ 首 ⑤ 頭

ク. カイロは使いましたか ① はい(部位と数) ② いいえ

ケ. カイロは有効でしたか ① はい ② すこし ③ いいえ

コ. 湯たんぽは使いましたか ① はい(部位) ② いいえ

サ. 湯たんぽは有効でしたか ① はい ② すこし ③ いいえ

シ. イグルー内の高さは、最大おおよそ何 cm だったですか (cm)

ス. 衣類は何枚重ね着をしましたか(パンツ, ブラを除く) 上 (枚) 下 (枚)

セ. 寝たのは何時頃ですか?

① ~23:00 ② 23:01~24:00 ③ 24:01~1:00 ④ 1:01~2:00 ⑤ 2:01~

ソ. 雪洞(イグルー)内では、寝る前に何をしていましたか ()

タ. 起きたのは何時頃ですか?

① ~4:00 ② 4:01~5:00 ③ 5:01~6:00 ④ 6:01~7:00 ⑤ 7:01~

チ. 朝起きたのは、どんな理由ですか。

① なんとなく ② 話し声で ③ 寒さを感じて ④ 排尿感 ⑤ 起こされた (その他)

ツ. 寝ている際に、冷気の流れ込みを感じましたか

① 全く感じない ② 人の出入りの時に感じた ③ 時々感じた ④ 朝方に感じた ⑤ 常に感じた

寝た。イグルー入り口はキャンパーのザックを重ねる事で蓋とした。翌朝の起床時間は午前7時とした。起床後はすべての用具を施設に戻し室内にて朝食を取った後アンケート調査を行った(表1)。また、身長、体重は自己申告にて調べ、BMI (Body Mass Index) を算出した。イグルー泊の際の着衣は、学生の任意としたが、平均としてはアンダーウェア上下、長袖コットン、タイツ、フリースセータ等により重ね着し、一番上は必ずスキー(ボード)ウェア上下であった。

3. 結果

初めて冬季キャンプ活動を経験したキャンパーに対して、イグルー泊を行った後に、寒さや睡眠などに関するアンケート調査を行った。なお、2月中旬のA大学のイグルー製作時の外気温は5~-5℃、イグルー泊後の翌朝午前6時の外気温は-9℃であった。また、3月上旬のY大学のイグルー製作時の外気温は一日中0℃以下であり、翌朝の午前6時の外気温は-11℃であった。

受講学生の身体特性を平均値 ± 標準偏差(最

小値 - 最大値) により示した場合、男子学生の身長 172.7 ± 4.8 (164.0-182.0) cm, 体重 63.7 ± 5.6 (55.0-72.0) kg, BMI 21.3 ± 1.2 (19.7-23.5)、女子学生の身長 160.7 ± 6.3 (147.0-172.0) cm, 体重 54.5 ± 5.2 (43.0-65.0) kg, BMI 21.1 ± 1.1 (19.8-23.6) であり、BMI 値から全ての受講学生は肥満者、るい瘦者のいない正常範囲の身体特性を有するものであった。

「イグルー内で寒さを感じたか」の質問に対して、強い寒さを感じた者はおらず、「寒さ感じた」と答えた者は 32 名中 3 名であった。「気にならない」が 11 名、「暖かい」と答えた者が約半数の 15 名、「蒸し暑さを感じた」者は 3 名であった (図 2)。寒さを感じた 3 名の者はすべて女子学生であり、内 2 名は雪壁面に寝ており、雪に接する「肩に冷たさを感じた」との記述が見られた。また、中央に位置していた者を含む 2 名はカイロを使用していなかった。しかし、寒さを感じた事で眠れなかったと答えた者はなく、3 名とも 5 時間以上の睡眠時間がとれていた。図 3 は重ね着の上下枚数を度数分布にて示したものである。上の着衣枚数が 2 から 6 枚、下が 1 から 4 枚と個人差が大きくみられた。寒さを感じた 3 名の者は、上に 4 から 5 枚、下は 3 枚の重ね着をしており、寒さを感じなかった者と比べても少ない着用枚数ではなかった。また、寒さを感じた者は、寝袋も首から頭までチャックを上げて就寝していた。一方、蒸し暑いと答えた者は男子 2

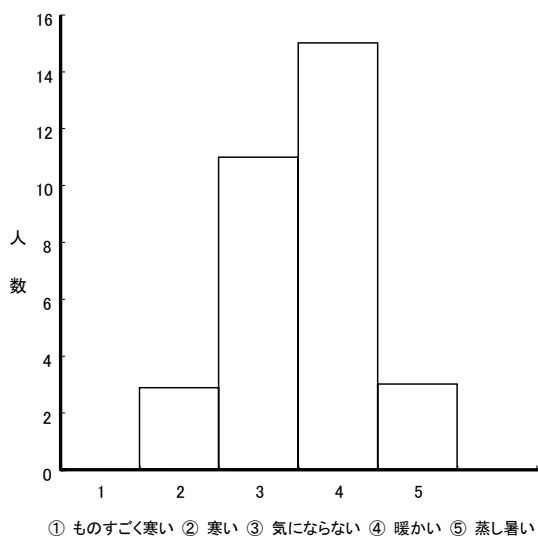


図 2 イグルー内の寒さに対する回答

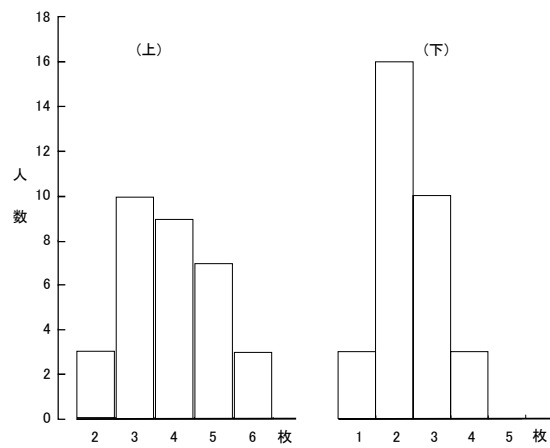


図 3 イグルー泊時の上下衣服の重ね着枚数

名女子 1 名であり、男子 2 名は中央に位置し、重ね着枚数は上下 3・2 枚、カイロの使用はなく、寝袋のチャックは腰までしか上げずに朝まで就寝していた。女子は上 5 枚下 4 枚の重ね着と、腰部に置いた湯たんぽによる熱に暑さを感じていた。

寒さ以外に、イグルー内で「身体の一部の冷たさを感じた」者は 12 名であった。その部位は、つま先 6 名、顔 5 名、雪に接していた肩 2 名、上半身 1 名であり (複数回答)、その中の半数の 6 名はカイロ、湯たんぽの使用をしていなかった。

イグルーは 7 つ作製され、それぞれ 4 から 5 名が並列になり就寝した。イグルーの底面の広さは、頭と足を交互にして並列に寝られる大きさとしてイグルーを作製したため、両サイドに寝るキャンパーは、片側が雪壁面と接する可能性がある。逆に、中央で寝るキャンパーは両側の者のぬくもりを感じやすいと考えられた。いかに重ね着をしようとも、身体が長時間雪に接していた場合は、10mm 厚のポリエチレンやウレタン等の含気量の多いマットにより遮断しない限り、雪の冷たさを感じられる。そこで、イグルー内に並んで寝た場合の両サイドの者には湯たんぽを提供した。湯たんぽの効果があったかの問いに対して、14 名すべての者が「効果あり」と返答した。湯たんぽの使用場所は、足部が 9 名、腰部 3 名、腹部 1 名、頭部 1 名であった。イグルー泊の際の寝る位置が雪壁の横であった者と両側がヒトに挟まれて寝た者の 2 群に分けアンケート結果を

表2 イグルー内での寝た位置とアンケート結果

	両サイドに寝た群 (n=14)	中央に寝た群 (n=18)
男女比	8:6	8:10
イグルー内は寒かったか	3.4±0.9	3.5±0.8
寒さを感じず眠れたか	3.6±0.6	3.6±0.8
体の一部に冷たさ寒さを感じた割合(%)	42.9	33.3
イグルーの狭さを感じたか	2.6±1.5	2.6±1.0
寝袋のチャックの開閉状態	3.6±1.1	3.9±0.8
カイロ使用	1.7±0.5	1.6±0.5
重ね着の枚数(上)	3.6±1.1	4.0±1.2
重ね着の枚数(下)	2.8±1.2	2.5±0.7
寝た時刻	2.8±1.2	3.2±1.3
起きた時間	3.8±1.3	3.9±0.9
冷気を感じたか割合(%)	28.6	33.3

点数化し比較した(表2)。寒さや狭さを感じた者やカイロの使用や重ね着の枚数など、ほとんどの項目において両群間に違いは認められなかった。ただし、体の一部に冷たさを感じたと答えた割合が、イグルー内の両サイドで寝た群に約10%高く、これは中央に位置した者からの回答には無い「肩の冷たさ」の訴えが複数あったことによる。

イグルー内に寝ているときに「冷気を感じたか」の問いに対して、32名中10名の者が「感じた」と回答したが、常に冷気を感じた者はみられなかった。冷気を感じたのは、「ヒトの出入りの際(7名)」と「朝方(3名)」であった。冷気を感じた者と感じなかった者との間に、イグルー内で寒さや冷たさを感じた割合、カイロの使用状況などを比較したが差異はみられなかった。また、睡眠時間にも違いはなく、冷気を感じた10名の者すべての起床時間は午前6時以降であり、睡眠に影響を及ぼしてはいなかった。

イグルー泊のため、午後10時に移動しイグルー内のセッティングなどに30分以上を要し、

午後11時から翌朝の7時までを就寝時間とした。図4には睡眠時間を示した。睡眠時間が4

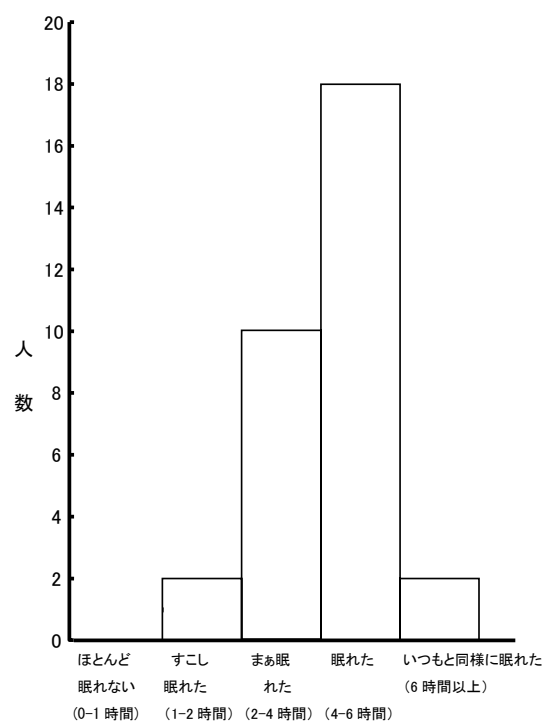


図4 イグルー泊における睡眠時間別人数

時間以下の人数は全キャンパーの約3割の11名（男子6名、女子5名）であった。眠れなかった理由としては、「床面の凸凹が気になる」、「隣人のいびき」、「トイレの行きづらさ」、「トイレに2回出る事への困難さ」や「出るための身動きの他者への気遣い」等が挙げられた。「トイレへの行きづらさ」を訴えた4名は両サイドに位置し

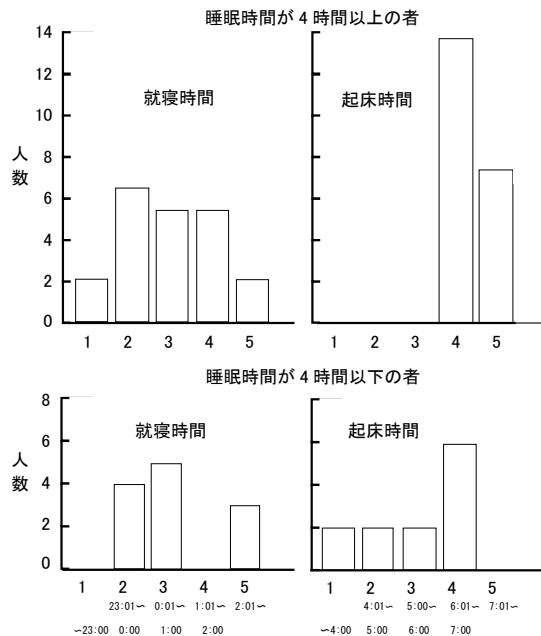


図5 睡眠時間を4時間で分けた際、の就寝時間、起床時間

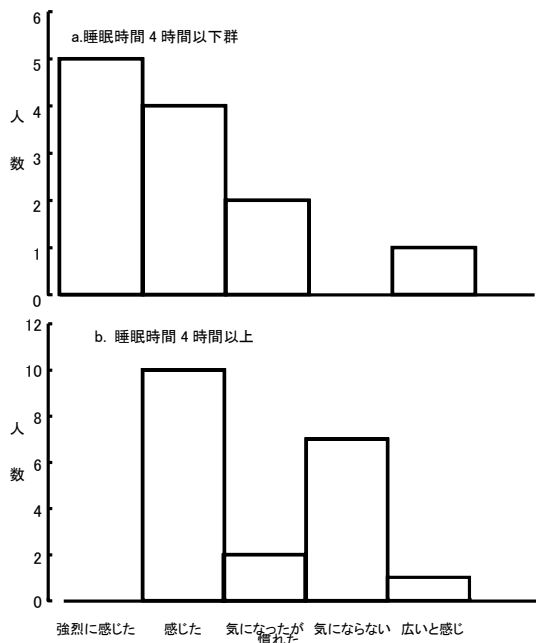


図6 睡眠時間4時間以上、以下で分けたときのイグラーの狭さに対する感覚の比較

た者であった。記述内容において寒さが睡眠を減らす理由と考えられる回答は見られなかった。また、就寝時間、起床時間を比較したところ睡眠時間を減らした理由としては入眠にいたるまでの時間ではなく、起床時間が早いためであり、いったん起きてから再び寝る事ができなかった者が睡眠時間の短縮を招いていた(図5)。

さらに、イグラーの狭さにストレスを感じる者が睡眠時間の短い者に多くに見られた。図6には、「イグラーの狭さを感じるか」に対する回答をまとめた。眠れない者12名中9名に「狭さ」を感じ、内5名は強烈なストレスとして感じていた。しかし、4時間以上眠れた者の中にも半数はイグラーに狭さを感じていた。空間の広がりに対する感覚は底面積だけではなく、高さの影響もある。そこで、イグラー内の高さや狭さや寒さに対する影響を調べた。ただし、天井高はキャンパーがアンケートに書いた数値をそのまま参考にしており、正確に測定した高さではない。

図7a-dはすべて横軸にイグラー天井高を、縦軸はa)寒さを覚えたかb)狭さを感じたかc)睡眠時間d)寝袋のチャック開閉位置を示した。それぞれの図で相関関係を調べたがいずれも有意性はみられなかった。その他すべてのアンケート項目において、図には示していないが、天井高に依存した変化はみられなかった。天井高は80から150cmとの違いがあったが、それに対して防寒態勢を変える事もなく、また、イグラー内で調整が容易な寝袋のチャック開閉位置にも違いが無

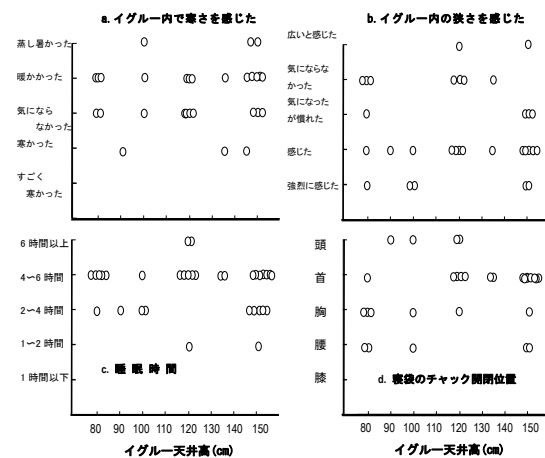


図7 イグラー天井高と寒さ、狭さ感覚、睡眠時間、寝袋のチャック位置

表3 イグルー泊に対する男女の行動・感想の差異

	男子学生(n=16)	女子学生(n=16)
イグルー内は寒かったか	3.8±0.7	3.3±0.9
寒さを感じず眠れたか	3.7±0.8	3.6±0.6
体の一部に冷たさ寒さを感じた割合(%)	18.8	56.3
イグルーの狭さを感じたか	2.7±1.6	2.5±1.0
寝袋のチャックの開閉状態	3.0±1.0	4.2±0.8 **
カイロ使用	1.8±0.4	1.5±0.5
重ね着の枚数(上)	3.4±1.2	4.4±1.0 *
重ね着の枚数(下)	2.4±0.9	2.4±0.7
寝た時刻	3.1±1.3	2.9±1.1
起きた時間	4.1±0.8	3.6±1.3
冷気を感じたかた割合(%)	31.3	31.3

t検定(Welch法)による有意差 * p<0.05, **p<0.01

く、寒さに関する感想や睡眠時間も同程度であった。

イグルー内の高さをむやみに上げた場合に、冷気が下がるため寝ている床面が寒くなる事が懸念される。本実習ではこれまで、天井高を1m程度とするようイグルーを作る際に指示してきたが、寒さ予防を意識したイグルー製作に際し高さに対する配慮は必要ないと考えられた。

最後にイグルー泊に対する男女の行動や感想の違いについて比較した。アンケート結果の項目を点数化し、平均値と標準偏差にて男女差を比較した(表3)。寒さを感じる程度には差が見られないうが、体の一部に冷たさを感じる割合は、明らかに女子学生が高く、16人中9名が冷たさを訴えていた。また、寝袋のチャックを首の上まで閉め、より多くの重ね着をするなど防寒への意識が、女子に有意に高い傾向が見られた。なお、平均値の差のt検定はWelch法を用いた。

4. 考察

寒さに対する体温調整能には男女差がみられた。女性には体温の性周期変動があり、男性より

相対的皮下脂肪量が多いため皮膚の断熱性に優れるが、代謝量が少なく、寒冷暴露時の代謝量の増加も少ない⁷⁾。また、男性に比べ女性は寒冷刺激に対する感受性が高いことが知られている^{9,11)}。さらに、体脂肪量は寒さに対する感受性に影響する¹¹⁾。本研究では体脂肪率は測定していないが、体重と身長からBMIを算出した結果は、厚生労働省⁵⁾が示すBMI正常範囲18.5以上25未満に全ての被験者はおさまり、肥満・るい瘦に該当する者はみられなかった。さらに、BMIと体脂肪量とは男女別に高い相関があり、また、同じ正常範囲内BMI値において男女間の体脂肪率を比較した場合、男性より女性が10%程度高い値を示すことが報告されている¹⁰⁾。これらの事実から、本研究での被験者の男子学生に比べ女子学生に体脂肪率が高いことが予測される。安静時の熱産生は肝・腎・心臓を主とする内臓器の代謝に依存するため、女性に体脂肪率が高いことは、逆に他の臓器割合を低下させ安静時代謝量を減少させる。このため、女性は寒さや冷たさをより感じやすくなると考えられた。寒さを感じる者は少なかったが、身体の一部に冷たさを感じる者

が全体の 1/3 程度存在した。寒冷環境では最初に熱放散を防ぐために四肢の皮膚血管が収縮し血流量を減らし、体の頭部・胸部・腹部といった生命維持に欠かせない深部温の維持に働く。このため寒冷下では、指先・足先が冷たくなりやすい。末梢部の冷えを防ぐために用いられるカイロなどの温熱効果は、温熱刺激を加える面積に比例して皮下の温熱受容感覚を高める⁸⁾。このため、寒い環境での宿泊時に感じる冷たさの軽減には、カイロの大きさや数を増やして使用するよう指導することが大切と考えられた。また、寒さを感じた者は、頭まで寝袋のチャックを上げて寝たとの回答がみられた。頭部・顔面部の冷却は他の身体部位より冷却効果が大きく多量の熱放散を起こす⁸⁾ため、寒さを訴える者には寝袋の使用法や帽子的着用などの指導も必要であろう。

体温調節機構において、生体に最も負荷の少ない外気温は 28 から 32℃の範囲であり、皮膚血流による放熱量のコントロールのみで体温維持される。四季の外気温に見合った衣服を着用した場合、いずれの季節においても皮膚とインナーとの間の温度（衣服内温）は 30℃前後が保たれている。睡眠時には基礎代謝量が 6～8% 低下する⁶⁾ため、寝るための至適な寝床内温は 29～34℃と言われている¹⁴⁾。今後は、実際の寝床内（寝袋内）温、衣服内温などを測定した検討も必要と考えられる。

本研究調査はイグルー内の寝る位置別にアンケート結果をまとめた。壁側に位置する者が雪に接しやすい部位は肩であり、冷たさの予防用の肩パットなどの工夫が必要であると考えたが、寒さに関しては、中央で寝る者との差異は見られなかった。しかし、トイレ等の際の移動の困難性にストレスが多い事も示された。また、寒さに対する感想が少ない一方で、狭さに対するストレスを半数近いキャンパーが感じていた。このようなストレスが、睡眠時間の短縮に影響していたと考えられた。登倉¹³⁾は、生体リズムの乱れが睡眠の深さや持続時間に影響する可能性を報告しており、イグルー内の環境に対するストレスが自律神経機能としての生体リズムを乱し、早朝の目覚めを誘発した可能性が考えられた。睡眠の疲労回復効果、身体修復効果、自律神経系の整調効果など

は広く知られた事実であるが、野外活動を充実させ、事故を起こさないためにも睡眠時間の確保に対する工夫が求められる。

イグルー内の天井高さにおいても、今回の調査で 80cm から 150cm まで約倍の違いがあったにも関わらず、寝袋のチャック開閉にみられるイグルー内で防寒のための行動や、寒さに関する感想、さらには睡眠時間と天井の高さとは関係がみられなかった。イグルー内にて人が横たわった場合には、人体から放散した熱は上昇するが、球状の構造であるイグルー内では内壁面に沿って下降するといった空気の流れが狭い室内で起きる。このため、極端に天井高が高くない限り、イグルー内の温度分布は比較的均一に保たれる²⁾。これまで天井高を 1m 程度とすることを目標にイグルーを作る際に指示してきたが、寒さ予防を意識した際のイグルー内の高さに対しての配慮はそれほど重要ではないと考えられた。さらに、寒さを気にして広さを制限する必要性は低く、多少余裕ある大きさのイグルーづくりがより快適な宿泊と睡眠を実現すると考えられた。

冬季野外活動におけるイグルー泊は、活動量、連携や協力・工夫の必要となる活動であり、また、挑戦といった要素も含むなど非常に魅力的な活動である。しかし、イグルー泊は暖房機を使用できない防寒のみの工夫による活動であり、寒冷に対する十分な安全策が必要とされる。本調査からは、イグルー泊は、床面の断熱と気温に対応した寝袋の使用、就寝時に寝袋が雪に直接に接することのない工夫、重ね着の指導、カイロ等の使用により、寒冷に対する安全は確保できる活動であることが示された。また、イグルー泊において睡眠時間を確保するためには、イグルー内の大きさにゆとりを保たせ、移動や閉所に対するストレスを感じさせない工夫が必要であることが本研究より示された。

5. 参考文献

- 1) アーネスト・S.Jr. (著)、ウエーナー フォーマン (訳) (1991) 図説エスキモーの民族—極北に生きる人々の歴史・生活・文化—、原書房、p76.
- 2) 本多勝一 (1981) カナダ = エスキモー、朝日

- 新聞社、ウサクジュへの道、p 19, 雪の家、p99-102.
- 3) 稲雄次 (1990) カマクラとボンデン、民俗選書 vol.20、秋田文化出版社、p23.
 - 4) ジョン バチラー (著)、安田一郎 (翻訳) (1995) アイヌの伝承と民俗、青土社、p320.
 - 5) 厚生労働省 (2010) 平成 22 年国民健康・栄養調査報告書、厚生労働省、第 2 部 身体状況調査結果、p87-124.
 - 6) 中山昭雄 (1981) 温熱生理学、理工学社、p86.
 - 7) 小川徳雄 (1996) 老若男女の温熱生理学：性差と加齢の影響、人間と生活環境、4:2-7.
 - 8) 大築立志 (1983) 生活の生理学、体表部位と温度感覚、朝倉書店、p117.
 - 9) Pettit SE, I Marchand, T Graham (1999) Gender differences in cardiovascular and catecholamine responses to cold-air exposure at rest, *Can J Appl Physiol*, 24:131-147
 - 10) 山本貴志子、西亀正之 (2000) 多周波数インピーダンス法による日本人の身体組成評価—体脂肪と体水分の年代比較—、*広大医誌*、48,259-266.
 - 11) Yasui T, H Uemura, M Irahara, M Arai, N Kojimahara, R Okabe, Y Ishii, S Tashiro, H Sato (2007) Differences in sensitivity to cold in Japanese men and Postmenopausal women aged ≥ 50 years, *Gen.Med.* 4:359-366.
 - 12) 田口洋美 (1994) マタギー森と狩人の記録、慶友社、p231.
 - 13) 登倉尋実 (1982) 被服と温熱生理学、*繊維機械学会誌*、35:328-333.
 - 14) 渡辺ミチ (1975) 衣服衛生と着装、同文書院、p134.

実践報告

南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性

佐藤冬果（筑波大学大学院）・渡邊 仁（筑波大学）・向後佑香（筑波大学）

Fuyuka SATO ・ Hitoshi WATANABE ・ Yuka KOGO

1. はじめに

社会の変化の中で子どもたちの直接体験の機会が減少し、多様な体験活動の充実が求められる中、平成 25 年に「今後の青少年の体験活動の推進について（答申）」¹⁾ が取りまとめられた。ここでは体験活動の意義や効果に加え、体験活動推進の重要性に触れ、「社会全体として体験活動を推進していくためには、国や地方公共団体のほか、地域・学校・家庭・民間団体・民間企業等がそれぞれの立場で自らの役割を適切に果たし、連携していくことが必要である」と述べられている。それを受け、多くの市町村や都道府県の教育委員会で、学校と地域が連携・協力した体験活動についての調査や報告がなされている。我々が取り組む自然体験活動においても、単一の事業体で活動を完結するのではなく、フィールドとする地域との繋がりを深め広げることで、体験活動推進の大きなウエーブを作ることができると考えられる。

また、事業体が地域と交流・連携することは、多目的に活用できる地形の存在（自然資源）を発見したり、地域の伝統文化の魅力（文化的資源）を再確認したり、地域住民の専門的な知識・技能（人的資源）を再評価するなど、地域資源の発掘の可能性を高めるだろう。その存在や価値を認識し活用することは、単一事業体ではフォローできない幅広い活動への取り組みにもなり、プログラムの充実を図る上で非常に重要になると思われる。

さらに、地域と連携した事業展開は、地域活性の視点でも重要であると言える。平成 22 年、「地域力創造に関する有識者会議」（総務省）²⁾ において、同じような経済的条件、自然的条件下において活性化している地域とそうでない地域の差を生じさせている大きな要因として「人材力」が指摘され、地域内外の人材間交流や、地域外の団体、つまり「ヨソモノ」の積極的な活用などが人材力活性の方法として挙げられている。キャンプ事業の開催は、スタッフや参加者などの人材交流を伴うため、非常に有効な人材力活性の手段である。

このように、地域と連携した事業展開は、「体験活動の推進」や「キャンププログラムの質的な充実」だけでなく、「地域活性」の可能性もはらんでいると言えるだろう。以上を踏まえ、本稿では「南会津アドベンチャーキャンプ」の実践とともに地域連携の実態を報告する。

2. 実践概要

2.1. キャンプの概要

(1) 主催・目的

本事業「発見！冒険！大自然！！南会津アドベンチャーキャンプ」は、野外教育団体 TOEL (Tsukuba Outdoor Education Lab.) が主催した。また、本事業の趣旨は以下の 2 点であった。

- ① 東日本大震災による被災地域に在住する児童の震災によるストレスを軽減し、心身の健康、リフレッシュを図るために、外遊びや自

然体験活動の機会を提供する。

- ② 南会津の豊かな自然の中で、仲間と楽しく活動し生活を共にすることで、自然への興味関心を育み、自立性や責任感、社会性を養う。

(2) 場所・期間

福島県南会津郡南会津町針生駒戸山にあるキャンプ場「みどりの広場」及びその周辺を活動場所とし、2013年8月1日～8月5日の4泊5日で行った。

(3) 参加者・募集活動

茨城県・福島県・宮城県・岩手県・栃木県に在住で、全日程に参加できる小学4～6年生（定員35名）を対象とし、市町村教育委員会を通じて各小学校に募集要項及びチラシを配布した。また、福島県教育委員会ホームページ「支援の申出一覧（リフレッシュキャンプ等）」への掲載を行っ

た。その結果、4年生11名、5年生5名、6年生7名（男子10名、女子13名）の計23名が参加した。

(4) 指導者と班編成

キャンプディレクターや本部スタッフとして大学教員2名が指導に当たった。その他、野外教育を専門に学ぶ大学院生及び大学生7名、そして現地NPO職員1名が指導に当たった。プログラム係や食料係は大学院生が、本部スタッフ、班付きのキャンプカウンセラーは大学生が担当した。

班編成は男女・学年混合で6人班3つ、5人班1つの4班編成とし、各班にキャンプカウンセラー1名を配置した。

(5) 参加費

被災地復興支援事業としての開催のため、参加費は5000円（食事代、保険代、プログラム費な

表1 プログラム内容

	プログラム	活動の詳細	地域資源(物的・人的)の利用・連携・協力
1日目	集合、移動	キャンプ場最寄り駅に集合(13時)、その場で保護者合同の出発式を行った後、バスでキャンプ場へ移動した。	【人的資源: 地元企業B】 ・駅からキャンプ場までの貸し切りバスとして、地元企業Bによる送迎の協力を得た。
	環境整備	班ごとに10人用家型テント1張の設営と、タープの設営を行った(写真1)。	【人的資源: 地元企業A】 【物的資源: みどりの広場】 ・テントの下に敷くすのこは、地元企業Aにより製作された。
2日目	農業体験	キャンプ場近隣で農家を営む地域住民の方の協力を得、ジャガイモ、タマネギ、ニンニク、キュウリ、ナスの収穫を体験した(写真2、写真3)。参加者たちは、野菜収穫の楽しさと同時に、農家の方との触れ合いを楽しんでいる様子であった。また、収穫した野菜をその場で口にし、その味に感動している姿も見られた。キュウリは次の活動である沢遊びにおいて沢の水で冷やして昼食とし、その他の野菜は、キャンプ中の野外炊事の食材とした。最終日にはキャンプのお土産として、参加者がそれぞれ自宅へと持ち帰った。	【人的資源: 地元住民による農業指導】 【物的資源: 畑】 ・キャンプ場から歩いて15分程度の距離で農家を営む地元住民の方が場の提供とプログラムの指導を行った。
	沢遊び	参加者は水の掛け合いをしたり、浅瀬に寝転んだり、タイヤチューブや水中ゴグルを用いて水の流れに身を任せてみたりと、豊かな自然に触れ合う様子が見られた(写真4)。	【人的資源: 地元企業C】 【物的資源: 黒森沢】 ・沢遊びは、地元の方からの情報提供を受け、黒森沢の浅瀬ポイントを利用した。 ・沢遊び後の入浴について、地元企業Cから日帰り入浴対応の協力を得た。
3日目	七ヶ岳登山	七ヶ岳登山(標高1635m)を行った。昨年度に実施した登山道を歩くルートに加え、登山道に沿うように流れる沢を歩くルートを新設し、参加者が2ルートから選択する方法を取った。沢歩きコースの方がより難易度が高く、体力も必要とされるため、沢歩きコースを選択できるのは6年生、もしくは本キャンプの経験者のみとした。その結果、7名が沢歩きコースを選択した。他の参加者は、生活班を基本に、新たに登山班(3班編成)を組み直した。どちらのコースも、見どころは登りの中盤にある護摩滝であるが(写真5)、小学生には少々難しい箇所もあるため、難所ではスタッフがサポートをするなどの安全管理を行った。山頂での昼食後、会津高原たかつえスキー場へと下るコースを通り、スキー場に併設された温泉施設をゴールとした。 新たにルートを追加したことで、難易度の高い沢登りコースを自ら選択し、登り切ったことが、参加者の自信に繋がっていた。加えて、今年度選択できなかった参加者でも、沢登りコースへの憧れや意欲が、次年度参加への意欲に繋がっていた。今後は、「長すぎる」という意見の多い下山ルートの検討に加え、リビーターが増えることも予想されるため、コースバリエーションを増やすことも課題となるだろう。	【人的資源: 地元企業B】 【物的資源: 七ヶ岳、黒森沢】 ・キャンプ場から登山口への移動、ゴール地からキャンプ場への移動は、地元企業Bの協力を得た。 ・活動フィールドは、地域のシンボルとなっている七ヶ岳と、その登山道に沿って流れている黒森沢であった。
4日目	個人別選択活動	参加者が生活班を離れ、前夜に説明された活動の中から興味のあるものを選択し、各活動に分かれて活動した。活動は、①沢遊び②アウトドアクッキング③焼き板④ネームタグの4種類を行った。	【物的資源: 黒森沢】 ・沢遊びグループが黒森沢の砂防ダムにて活動を行った。
	キャンプファイヤー	キャンプファイヤーでは班ごとのスタンツ(寸劇)の時間を設けた。テーマは「キャンプの思い出」と設定し、4日目の自由時間の一部を使って、発表・練習を行った。各班、キャンプで印象的だった場面やキャンプを通して感じた思いを寸劇や歌で表現していた。	
5日目	はがきタイム	最終日、テントなどの撤収がすべて終わった後、ふりかえりの一環として「はがきタイム」を設けた。参加者へ、七ヶ岳登山の山頂で撮った班写真を印刷したはがきを配布し、「キャンプを終えての気持ち」「おうちの人へ伝えたいこと」を言葉にして表現してみるよう、声掛けをした。参加者はそれぞれ思い思いの場所ではがきと向き合い、時間をかけて完成させていた。完成したはがきは、保護者へ向けてキャンプの思い出や印象に残った出来事を伝える内容に加え、「参加させてくれてありがとう」といった、感謝の思いを素直にしたためている参加者が多く見られた。はがきは、キャンプ終了3日後に南会津針生区の郵便局から発送した。	【人的資源: 地元企業B】 ・キャンプ場から駅までの貸し切りバスとして、地元企業Bによる送迎の協力を得た。

ど)という低価格に設定し、人件費などは独立行政法人青少年教育振興機構「ゆめ基金」の助成金で補われた。

2.2. キャンププログラム

表1にプログラム、活動の詳細、地域資源の利用・連携・協力について整理した。



図1 テント設営



図2 ジャガイモ掘り



図3 ナスとキュウリの収穫



図4 沢遊び



図5 護摩滝

2.3. 事業評価

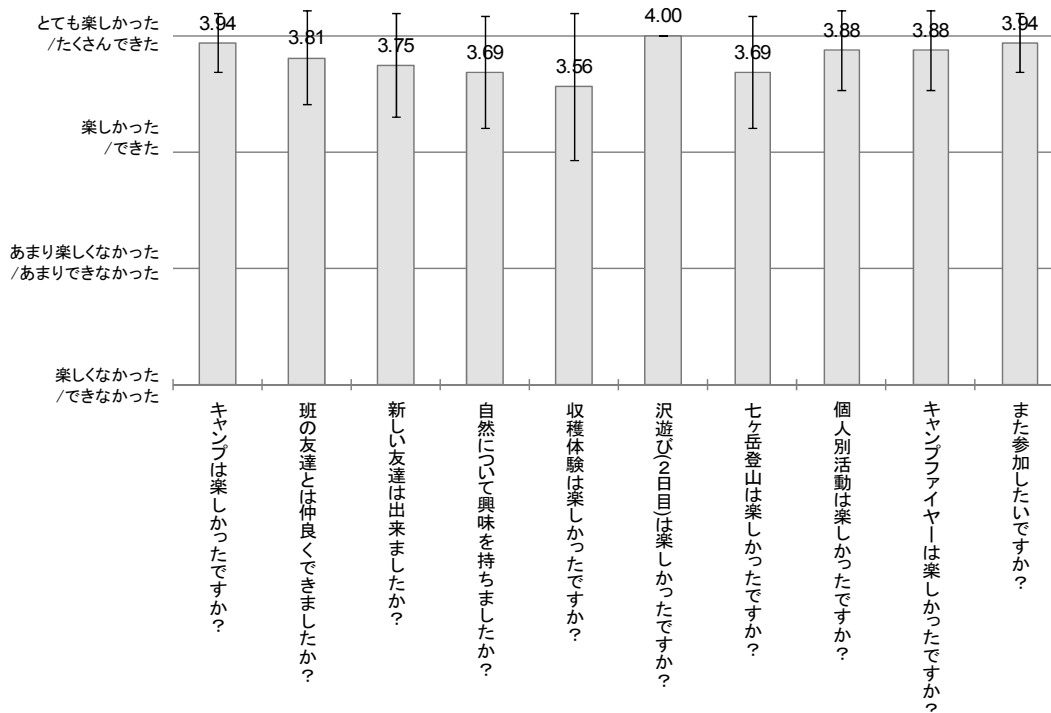
2.3.1. 目的と方法

本事業を評価するため、自己評価として参加者本人に、そして他者評価として保護者を対象に、キャンプの事業評価を行った。本調査は質問紙法を用い、キャンプ終了1か月後(平成25年9月)にキャンプの報告書と合わせて調査票を郵送した。有効回答は保護者17件、参加者16件であった。自己評価(参加者対象)の内容は主にキャンププログラムの満足度や要望について、他者評価(保護者対象)は主に事前の申し込みから参加までのマネジメントに関する評価について、調査を行った。

2.3.2. 結果と考察

キャンプの満足度について、自己評価(参加者)、他者評価(保護者)ともに概ね高い評価を

表2 キャンプの事業評価(参加者)調査結果(N=16)



受けた(表2、表3)。

自己評価(参加者)において、16名全員が「沢遊び」を「とても楽しかった」と選択しており、満足度の高いプログラムであることが再確認された。また、自由回答では「登山」について触れている参加者が多く、普段の生活とは異なるダイナミックな自然体験が、参加者の印象に残っていたようである。また、このキャンプで初めて「沢遊び」や「登山」を経験した参加者も多く、自然体験の機会が減少傾向にあることが窺えた。

他者評価(保護者)においては、プログラム自体に対する評価、活動報告書やカウンセラー報告書(キャンプ中の子どもの様子をまとめた所見)などの事後報告資料に対する評価、そして子ども

の反応を通じての評価などのコメントが多く見られた。また、昨年度の課題³⁾である「資料の分かりやすさ」において改善傾向が見られた。キャンプ場など活動フィールドについてや、持ち物について写真と文章で説明する資料を追加した結果であると考えられる。そして参加者と保護者の両者から、中学生対象コースの開催(対象学年の拡大)や、冬季のキャンプ開催(年間を通じた事業)の要望が見られ、今後の事業展開に対するニーズが確認された。

今後の課題としては、集合解散場所の検討が挙げられる。キャンプ場最寄り駅(会津田島駅)を集合・解散としているが、遠方からの参加者にとっては、送迎が保護者の大きな負担になってい

表3 キャンプの事業評価(保護者)調査結果(N=17)

本キャンプの満足度はどうでしたか? 4:満足-1:不満	平均		標準偏差		
	3.71		0.47		
本キャンプはどのようなメディアで知りましたか?(複数回答有)	チラシ	教育委員会HP	ロコミ	その他	
	16	1	0	1	
本キャンプの価格設定はどうですか?	非常に安い	安い	適正	高い	非常に高い
	5	8	4	0	0
開催期間(4泊5日)についてどうでしたか?	もっと長い方がいい		4泊5日がいい	もっと短い方がいい	
	3		13	1	
開催時期(8/1~8/5)についてどうでしたか? また、いつが適当ですか?	適当	7月後半	8月前半	8月中旬	8月後半
	12	2	2	1	0
配布資料についてどうでしたか?	わかりやすかった		わかりにくかった		
	16		1		
今後も、このようなキャンプにお子様を参加させたいとお考えですか?	はい		いいえ		
	16		1		

た。送迎がネックとなり参加を断念したケースもあった。開催地域へ参加者家族が訪れることが地域活性に繋がっている側面もあるが、集合解散場所は今後検討する必要があるだろう。

3. 地域連携について

3.1. 地域との連携プロセス

本事業開催においてもたれた地域連携の関係を図6に表した。

開催地域においてキャンプ事業の招致を中心的に行い、全面的な協力を得たのが地元企業Aである。この地元企業Aを中心にして地元との繋がりが生まれ、様々な協力を得たことで本事業が成立していった。

中でも、本事業において送迎バスの手配や、キャンプ中の食料の依頼、キャンプ場の貸し切り

依頼など、マネジメントに関わる協力を得ることができたのは、地元NPOEとの連携によるものである。当該地区でキャンプ事業を行ってきたEが持つネットワークを、本事業でも活用できるように協力を得た。

また、地元NPODの職員が本事業のスタッフに加わったことで、活動フィールドの情報や、地元の文化の情報、専門的な知識や技術を持つ地元住民の情報など、当該地区でキャンプを行う上で様々な情報を共有することができた。今年度プログラム「農業体験」は、地元NPODの職員とともに、当団体が行ってきた農家との交流によって実現したプログラムである。

3.2. 課題と可能性

事業開催において地域住民や地元企業から非常

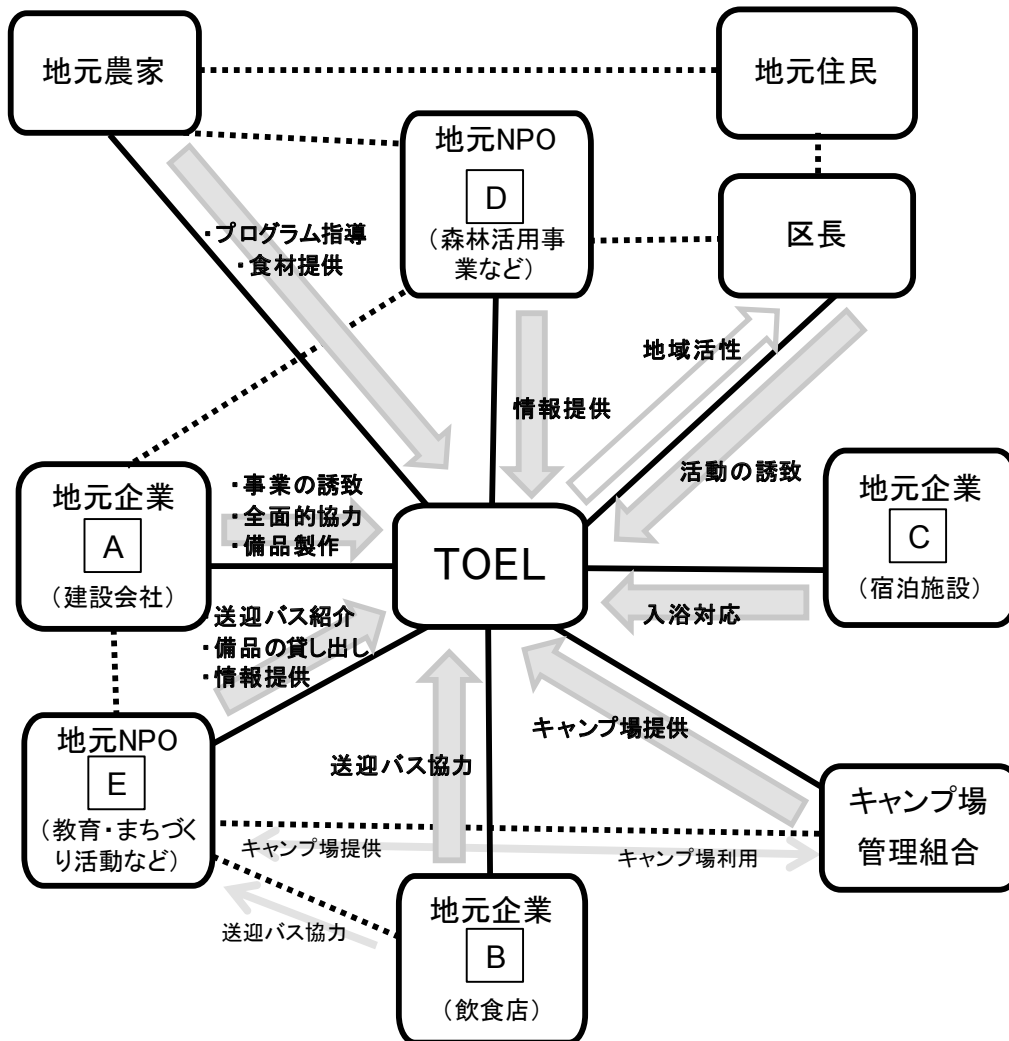


図6

に大きな協力を得たが、それは野外教育のもつ教育効果への理解、そして地域への影響に対する期待によるものであった。主催団体として、その協力に応えるためには当該地区の「地域活性」に繋げることも、事業を継続する上でも重要と考えている。

地域活性の中でも、平成 20 年 11 月から平成 22 年 8 月にかけて行われた「地域力創造に関する有識者会議」（総務省）において、同じような経済的条件、自然的条件下にあって活性化している地域とそうでない地域の差を生じさせている大きな要因として「人材力」が指摘されている。そして人材力活性化に向けた 3 つの柱として、① 地域住民の「個々の人材力の育成・強化」や、② 地域内外の「人材力の相互交流とネットワークの強化」、そして③「ヨソモノ」、つまり外部団体の積極的な活用や、外部からもたらされたノウハウ継承者の育成などの「人材力を補完するための支援」の 3 点が挙げられている。この視点においても、本団体が貢献できることが多くあるだろう。

野外教育を専門とする大学教員や学生がスタッフを務めることが特徴である本団体は、野外教育に関する専門的な人材のプールとして、地域との交流やネットワーク強化を行うことが可能である。また、地域でキャンプ事業を開催することで、地域住民がその知識技能を生かす人的資源活用の「場」の提供を行うことができる。つまり、今後更に地域との交流を深め、地域の豊かな人的資源を生かしたプログラム開発ができれば、地域の人材力の強化、しいては当該地区の更なる地域活性に繋げることができる。そのためにも、本団体と地域住民の継続的な交流とプログラム開発が、今後必要になるだろう。

4. まとめ

本稿では、TOEL 主催の南会津アドベンチャーキャンプに関して、その活動と事業評価、そして地域との連携について整理をした。その結果、以下のような示唆が得られた。

(1) 事業全般について

- ・参加者及び保護者共に、事業に対する評価は高かった。特に「沢遊び」「キャンプファイヤー」

「登山」が評価の高いプログラムであった。

- ・現在はキャンプ場最寄り駅が集合解散場所となっているが、遠方からの参加者にとっては送迎が負担であった。集合解散場所についての検討が必要である。
- ・本実践が行われた地区は自然環境が非常に豊かである。しかし、活動に利用できるフィールドなどの地域資源の把握が十分ではなく、様々なプログラム実施の可能性を秘めている。荒天時の対応、そしてリピーターへの対応の意味でも、地元関係者とともフィールドの理解を深め、プログラム開発をしていく必要がある。
- ・アンケート結果から、「対象学年の拡大」、「冬季のキャンプ開催」に対する要望が見られた。対象や季節に適したプログラム開発、及び指導者の養成・確保が課題であるが、地域と連携しながら開催に向けて準備をしていきたい。

(2) 地域連携について

- ・本事業は、様々な団体・個人からの協力を得たが、それは野外教育のもつ教育効果への理解、そして地域への影響に対する期待によるものである。当団体と地域との交流を深める中で、本事業に対する理解者のネットワークが広がっていき、多様な形での協力へと繋がった。このような展開は、本事業に限らず、社会全体として体験活動を推進していくための非常に重要な要因であると考えられる。
- ・地域との交流の中で、地域住民のもつ知識や技術に触れ、地域の人的資源の豊かさを再確認した。今年度プログラム「農業体験」は、地域の人的資源の活用であり、地域文化の理解の第一歩であると言える。このような連携は、今後、地域を生かしたプログラムの充実大きく影響すると考えられる。
- ・地域と連携した事業展開は、地域活性の可能性もはらんでいる。事業体である我々は、野外教育の専門性を持つ人的資源プールとしてネットワークを構築し、地域の人的資源を活用する場を提供する「ヨソモノ」団体としての役割を担うことが求められる。

参考文献

- 1) 中央教育審議会（2013）今後の青少年の体験活動の推進について（答申）（中教審第160号）
- 2) 地域力創造に関する有識者会議（2010）地域力創造に関する有識者会議最終取りまとめ
人材と資源で地域力創造を～まだまだできる人材力活性化、総務省
- 3) 清水啓一、渡邊仁、向後佑香（2013）被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題、キャンプ研究、日本キャンプ協会、16、15-21

実践報告

父子キャンプ（パパチルキャンプ）の実践

石井 勝（特定非営利活動法人ポポーのひろば・山形県キャンプ協会）

Masaru ISHII

はじめに

わたしたち「ポポーのひろば」は、山形県の中心部の山形市から30Kmほど北部にある村山市で活動する子育て支援団体です。村山市は人口26,000人ほどの水田などの農業を主産業とした少子高齢化がすすむ過疎地帯であり、東に甕岳、西に葉山がそびえたち、中央を母なる最上川が優雅に流れる風光明媚な土地柄です。

子育て家庭に「ふれあい」と「学び」の機会を提供することを目的に7年前に任意団体として立ち上がり、その後、村山市子育て拠点施設の新設に伴い「親子交流ひろば」の委託管理を任された事をきっかけに法人格を取得し、ひろば型親子のあそび場と子どもの一時的預かり、ファミリーサポートセンター業務などを行っています。そのなかで「森のようちえん事業」や「父子キャンプ（パ



写真1 キャンプネームをつくる



写真2 アイスブレイク

パチルキャンプ）」など、幼児の自然体験活動をとおり、郷土愛を育む事業を年に数回実施しています。

スタッフは、子育てに一段落付いた先輩ママがほとんどで、わたしが男性ひとりの黒一点状態ですので、野外活動等は山形県キャンプ協会の後援を頂き、外部講師をお願いして実施しているのが現状です。

父子（パパとチルドレン）キャンプを始めた経緯

数年前まで「日頃子育てで疲れているお母さん方に自然の懐で癒されてほしい」との思いから母子（ママチル）キャンプを実施しておりました。同じ年頃のお子さんをお持ちのお母さん同士が自然のなかで時には協力し合い・同じ時間を共有し合うことで居心地のよい空間が生まれ、育児スト

レスの軽減につながればとの発想から実施でした。ところが、主催者の思いとは裏腹に参加したお母さん方は「子どもにいろいろな体験をさせたい」「子どもの為に…」との思いからつついガンバリ過ぎちゃうんですね（笑）せっかく自然の中に癒しを求めて来ているのに、余計にストレスを抱えることになってしまいます。そこで、父子（パパチル）を対象に実施したら「お母さんは家でのおんびりできるのでは？」と思った、正に逆転の発想からの思いつきでした。

時期を同じくし、山形県では父親の子育てをテーマにした「パパスクール事業」がスタートし、「お父さんが抵抗なく参加することができるアウトドアの手法を取り入れることで、家事や子どもとのふれあいを体験する」とのふれこみで、単年度限りとの制約がありましたが委託事業をゲットすることができ、資金面での問題をクリアすることができました。企画段階から心配されたことは、「父親と子どもが対象では参加者が集まるだろうか？」と言うことでした。幼稚園・保育園にチラシを配布し、地元の地方新聞に掲載をお願いしました。ホームページでのPRやひろば利用者にも積極的にアプローチした結果、私たちの心配をよそにほぼ定員に達することができました。

参加者アンケートを見ると父親自ら進んで参加した者よりも、母親からのプッシュで参加したお父さんが多かったことを見ると、どこの家庭も母親のチカラが増大している現状が読み取れるのかもしれない。

あとで調べて分かったことですが、父と子のみを対象とした組織キャンプは全国的にも珍しく、幼児が対象であれば尚の事ほとんど実施例が無い



写真3 さあ 冒険の森へ



写真4 ネットワーク

ことが判明しました。

今年のパパチルキャンプの様子

今年で3回目を迎えたパパチルキャンプですが、開催時期が良く幼稚園・保育園等の運動会と重なったこともあり、参加者集めに苦労した年でした。内容は、毎年人気のある「お父さんのカッコイイところを発揮できるアスレチック体験」や「日頃の生活でなかなかできない、さかなの手づかみ体験」などを中心に、「野外活動の定番である野外すいはん活動やテント泊・キャンプファイヤー」などを計画していましたが、生憎の雨にたたられ、予定していたキャンプファイヤーは中止、宿泊場所は急遽体育館の中へテントを張って対応しました。何よりも悔しかったのは、フィールドアスレチックの最中に雨が降ってきたので、イカダ体験を出来ないで終了した子どもたちが「いつ、お舟に乗れるの…」との声があった時ほど天気を恨んだことはありません。

一晩中雨が止むことはなく翌日の道路は冠水し、水は濁り小雨降る中のさかな捕まえとなりましたが、子ども達もお父さんも夢中になりながら、とびきりの笑顔で活動していたのが印象的でした。キャンプの専門家が講師として控えていることが、はじめて野外活動に参加するお父さん方にも「こころの安全」として安心材料になったのかもしれない。また、事後アンケートを見ると、「大変だったけど、雨の中でも楽しんで活動することができた。」「雨だからこそ思い出深いキャンプになった」などの声が聞かれたことは主催者としてうれしい限りです。



写真5 ターザンロープ



写真7 いかだに挑戦



写真6 「おやじの会」

夜には毎回恒例の「おやじの会」を開いていますが、同じ年頃の子どもを持つおやじ達が、酒も飲まずに「わたしの子育て論」を語る様は毎年見物であり、時間を忘れてお互いが刺激を受けると共に、今後の子育ての糧になるものと自負しております。これがあるからこそ子育て支援団体が主催する意味があるように感じています。

また、参加者を見るとほとんどの参加者が男の子であり、女の子を持っている方の参加が非常に少ないと感じました。野外教育に対して男の子が

9 / 7 (土) ※雨天のため変更した実際に行った日程です。

時間	内容など	場所
10:00	チェックイン 参加費の納入	本館 玄関前
10:30	開会行事 自己紹介 アイスブレイク	本館 集会室
12:00	父子一緒に昼食	本館 食堂
13:00	移動 フィールドアスレチックに挑戦	どらえもんコース
15:30	野外すいはん (サラダ & カレーライス) 夕食 あとかたづけ	小朝日炊飯棟
19:00	おやこゲーム テント設営	本館 体育館
20:30	子ども達は就寝 (ボランティア見守り) お父さんは「自由参加のおやじの会」	本館 体育館 集会室
23:00	お父さん就寝	

9 / 8 (日)

時間	内容など	場所
6:30	起床 洗面 身支度 など 朝食 (セルフハンバーガー)	本館 体育館
9:00	移動 さかなのつかみ取り さかなの調理 炭火焼	大鳥池・いろいろの館 小朝日炊飯棟
11:00	移動 着替え テント撤収	本館 体育館
12:00	おにぎり弁当昼食	本館 体育館
13:00	クラフト活動 (手づくりコンニャクに挑戦)	本館 体育館
14:30	ふりかえり 閉会行事 チェックアウト	

行うものと言う偏見がまだまだあるのかもしれませんが、これは親の勝手な思い込みの様に思えてなりません。

母子キャンプと父子キャンプの違い

主催者の思いとしての母子キャンプは、日頃子育てに奮闘している母親に自然のなかでのんびりリラックスしてほしいとの思いからの開催でしたが、母親は常に子ども中心の受動的であり「子どものために私が頑張らなければ…」との思いが強く、子どもに尽くし母親が疲れると言う本末転倒



写真 10 野外すいはん



写真 8 さかなのつかみ取り



写真 11 いただきます



写真 9 さかなの調理

な結果となりました。父子キャンプに参加した父親は、「ほかのお父さんの行動や声掛けを興味深く観察し、自分の子育てに活かしていく」という他者から学ぶ姿勢が伺えました。そして、父子一緒に楽しみながら「おやじのカッコイイところを子どもに見せる」ことも忘れない姿勢は、まさに能動的と言えます。それらの違いを下の表にまとめてみました。

以上の結果は大変興味深いもので、母性と父性の違い等もあるかと思われませんが、それらの詳しい研究はまたの機会とします。

	対象者	目的	親の様子	親の姿勢
母子キャンプ	0～3歳の子どもと母親	母親の リラックス	子どもに尽くす ↓ 母親が疲れる	受動的 共感から学ぶ 子ども本位
父子キャンプ	3～7歳の子どもと父親	父親の 心おこし	子どもに伝える ↓ 父親も楽しむ	能動的 他者から学ぶ 子ども附随

※上記の比較表はポポーのひろばで行っている事業比較であり、他団体の事業は当てはまりません。

野外教育団体との協働

野外教育団体が「森のようちえん」や「幼児キャンプ」などを取り組む例は多いですが、幼稚園・保育園でもない子育て支援団体が自然体験活動を主催する例はまだまだ少ないようです。ポポーのひろばは子育て支援団体であり、子どものお世話や親支援はお手のものですが、野外活動に関しては素人であり、ましてや女性の職場ですので野外活動の専門的な団体との協働が不可欠な現状です。キャンプ協会の指導者には趣旨をご理解いただき、必要以上の支援は行わず父親同士の共助を促す指導体制を取って頂いています。キャンプファイヤーや野外炊飯指導などの専門技術を要することのほかに安全面の配慮などはキャンプ協会が担い、幼児の衛生面や生活面などをポポーのひろばが担うように役割分担を行い、車の両輪のように支えながら運営しています。

今後の展望

この事業はリピーター率が高く、参加した方の満足度が高いことが伺える一方で、リピーターが多くなれば専門的な野外活動への要望も多くなりつつあります。ポポーのひろばが考えるパパチルキャンプは、父子が野外で活動するきっかけになるような、誰もが気軽に参加できるものでありたいと考えています。そこで、今後はパパチルデイキャンプなどの参加しやすい事業や、ファミリーキャンプの中で母親対象プログラム・父子対象プログラムなど、家族が同じ会場に居ながらそれぞれが別の活動を体験するような企画にチャレンジしていきたいと考えています。



写真 13 「はじめてのテント」



写真 12 手づくりコンニャク

実践報告

「災害に備える」野外力をきたえよう

アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

松前雅明（福島県キャンプ協会）

Masaaki MATSUMAE

キーワード：災害対応キャンプ、体験活動、アンケート、反省と課題

1. はじめに

福島県キャンプ協会では、2004年10月23日に発生した（新潟県中越地震）における「ボランティア活動の実際を学ぶために」2009年9月19日～20日「災害とキャンプ協会の備え」と題し（BUC）を開催してきました。

2011年3月11日発生（東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故）により甚大な被害をこうむり、汚染された居住地の表土や発生したガレキの一時保管を行う中間貯蔵施設の建設もままならず、大震災発生から2年目を迎えた今でも復興の兆しがなかなか見えません。復興には長い時間と多くの労力がかかります。この様な状況の中でキャンプ協会として「何が出来て」「何が出来ないのか」という視点で関係者・関係機関と話し合いを行ってまいりました。2012年2月上旬「フォレストパークあだたら」財団の担当の方から「災害対応キャンプ」の実施について提案を受け、福島県キャンプ協会として出来る限り協力してゆくこととしました。

2012年8月4日・5日

災害対応キャンプ もしもに備えるアウトドア
×災害救助活動展

○震災を知るブース・アウトドア体験ブース・アウトドア用品メーカーブース・スペシャル講座

2012年11月11日

災害対応キャンプ 大玉村の子ども編（小学高学年と保護者）

2013年3月10日

災害対応キャンプ ≪3, 10≫（中学生対象）

- 様々な体験をしておく＝災害時に自分の身は自分で守れるように（たき火など）
- ワークショップ＝震災時に困ったこと・こうすれば良かったと思うこと。電気が止まった。お店が閉まった。など困ったことを聞き取り次回の参考資料とする
- 避難所となったフォレストパーク＝体験談・支援物資・ボランティアの紹介
- ワークショップ＝ナイフを使ってハシを作る。
- 身近なもので体温を保つ＝新聞紙・ゴミ袋・ラップ
- シェルター作り＝ブルーシート・ロープを使ってプライベート空間の保ち方
- 水を運ぶ・使う＝ポリタンクで水運び・ポリタンクがないときの工夫・バケツ一杯の水で何が出来るか
- 野外トイレ体験＝水道が使えないとき・水が無いとき
- たき火で暖と炊事＝火を起こしコントロール・お湯を沸かす・アルミ缶でご飯炊きなどを実施してきたところです。

2. 実践内容

2.1. キャンプの概要

(主催・目的)

本事業は、福島県福島市にある(特非)福島県レクリエーション協会が主催する第68回全国レクリエーション大会2014 福島 プレ大会として福島県キャンプ協会が主管し、

『災害に備える』野外力をきたえよう!

アウトドア体験 キャンプ

何事にもへこたれない子どもの育成を目的としたキャンプ

としてファミリー層を対象に①モノづくり②ロープワークとシェルター作り③野外力をきたえよう④たき火の点火と取扱⑤水の確保と運搬の各コーナーをワークショップ形式で、楽しみながら体験しようと計画しました。

(日時・会場)

事業は、1泊2日(平成25年9月14日(土)～15日(日))の日程で資材は前日に自家用車一台分、当日に2台分を搬入した。

会場は、福島県安達郡大玉村玉井字長久保68「フォレストパークあだたら」のグループサイト及びフリーサイト周辺で行った。

(対象・指導者・参加費)

対象は、福島県を中心にキャンプ愛好者(大人も子供も)キャンプに興味、関心のある方として一般募集(地元新聞社2紙)に掲載を依頼し、また会員の手で公民館等に配布、友人に呼びかけを行い参加者を募った。実際の参加者は(幼児・小学生・中学生)が16名、大人が14名の計30名でした。スタッフは26名(青森県1名・宮城県1名・山形県1名・新潟県2名・福島県20名)(視察)として滋賀県1名)、参加費は中学生以上2,000円、小学高学年1,500円、小学低学年1,200円、幼児800円を負担していただき(食事代)(プログラム費)とし、人件費等は(公益)日本キャンプ協会の2013年度地域活動支援金で賄われた。

なお、施設利用料金及び傷害保険料は(特非)福島県レクリエーション協会に負担していただいた。

2.2. 活動について

【8つのワークショップを計画】

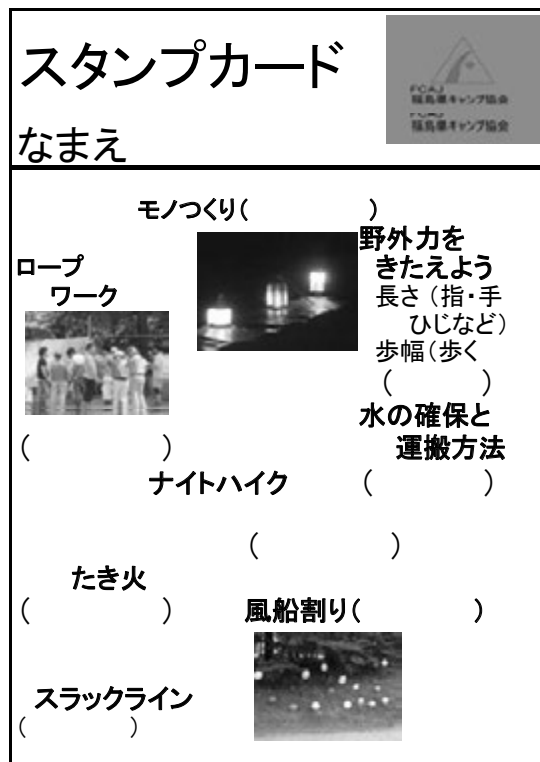


図1 スタンプカード



写真1 横断幕

体験ごとにスタンプカードにショップの担当者にサインをもらい、全て体験した子供にはプレゼントを渡す予定でした。初日のワークショップは、予定したプログラム6種類を無事終了となりましたが、2日目に予定していたプログラムは、台風の接近に伴う風雨により残念ながら取りやめとしました。

※ アンケートは数値評価を想定しなかったため一部抜粋とした。

配布枚数 35枚 集約数 19枚

例、○(主な感想) ●(ご意見)

①モノづくり

アルミ缶（350 ml・500 ml）をカッターナイフで加工しランタンを作る。缶詰め缶でテーブル照明を作る。作ったランタンを使ってナイトハイク



写真2 アルミ缶ランタン



写真3 缶詰め缶テーブル照明



写真4 ナイトハイク

- 刃物の使用はモノづくりの基本、つくりことの楽しさと創作で心のゆとりが出来た。
- アルミ缶を利用してのランタンは、日常にあるものを使用し安全なあかりを使えた。ナイトハイクに使用してよかった。

○廃物（空カン）使用のランタン作りは、子どもも関心が高く完成品を利用した夜間歩行はよかった。

○缶を切り、その中にローソクを立てて、ランプを作る発想が無かったので、ビックリしました。

●道具・工具とも材料も含め足りなかったと思う。

●興味はあった様ですが、子どもにとってカッターは少し危なかった様です。

②ロープワークとシェルター作り



写真5 ロープワーク

簡単なロープワークとロープを使いブルーシートを利用しシェルターをつくる。

○親としてはこういう事を教えたいと思います。機会もなかなか無いので。

○ロープ一本で役に立つことが沢山あることを知りました。

○日常生活や人命救助に役立つロープワークは楽しい。

○その場に合った縛り方が自由にできたら嬉しいですね。

●小さな子どもの場合、結びというものにどう興味を持たせるかが、難しいと感じました。

●男の子たちが面白がってシェルターづくりをやっていて見ていた親が次第に口を出す。手を出す。

③野外力をきたえよう

歩幅や腕の長さ、手のひらの大きさ、指の長さなど自分自身の身体のサイズを知る。知ったうえで計測してみる。



写真6 野外力をきたえよう

- 自分の体のサイズを知っておくと便利という体験はとても参考になりました。
 - 何もなくても自分の五感で災害時には役立つと思います。
 - 大人は昔のことを思い出した様子でした。
 - POPの不足、メジャーが少ない。
 - 自己計測項目を増やして、日常利用を奨める。
 - 身体的な計測をもっと充実させたかった。
- ④たき火の点火と取扱い



写真7 たき火(メタルマッチ)

- マッチ・ライター・メタルマッチなどで点火し、たき火をコントロールする。
- 現代生活ではふれる機会がありません 良い経験が出来たと思います。
 - 火の大切さを実感しました。
 - 火起こしすることの難しさを見ていて実感しました。
 - 教えすぎで、参加者の体験として不足感があります。
 - 火の扱いの罪と善の両面を学べた。
 - 太陽が出ていたらフラスコ・水晶玉・反射鏡な

ど利用したら面白い。

⑤水の確保と運搬方法



写真8 ダンボールとビニール袋(車載)



写真9 ペットボトル(巻き結び)肩にかけて運搬

- 災害時、水道がストップした場合にどのように水を確保するか、井戸のある家を覚えておく。湧水場所を知っておく。でも運搬はどうする。
- 取っ手のないペットボトルもロープの結び方で肩にかけて簡単に運搬できることを知りました。
 - 災害時には大変な水の確保に苦勞に思います。良いヒントになりました。
 - 災害の時に一番困るのは水の確保と便所かと思う。

- ゴミ袋とダンボール、すばらしく役に立つ。
- 水は生活にとっても大切、衛生的な確保の方法や運搬など確認できました。
- 毎日、水なしでは生きられない、もっと節水と飲料水のありがたさを知る。
- 水の節約方法について、指導してほしいと思いました。

2.3. 全体を通しての感想(参加者及び一部スタッフ)

- 今までは、遊びの延長だったことが、震災後は真剣に取り組み考えるようになりました。
- 東日本大震災でもキャンプの道具など使うことができました。アウトドア体験は必要だと思います。
- 子どもはキャンプ初体験でしたが、大変楽しんだ様です。ナイトハイクはいい思い出になった様です。
- ライフラインが切れてしまったとき、どのようにして生きるのか! 「生きる力」は今回のようなキャンプで培われるものと思います。
- 人との調和を大切にすることと、食や自然を大切に、今、元気に過ごせることに感謝致しました。
- ファミリーでの参加や子ども達だけの参加もあり、交流もできました。
- この様なプログラムのキャンプ体験は貴重なものと思いました。
- ショップでの滞留時間が少なかった。
- 次回は、各グループ別に飯盒炊飯なんかも考えてみたらと思います。
- 雨天時の対策と連絡の確立
- 今回、災害に備える。とのことでしたが、各ブースに共通して、二重、三重のバックアップが必要だ。
- 各ショップ毎に装備品の打ち合わせが必要(装備が十分でなかった。)
- 炊事用の水場と調理用カマドの位置が離れていたため時間がかかり大変だった。
- テントサイトが広く、参加者への案内、集合等に時間を要した。

反省と課題

参加者の方々と東北ブロックの皆様方、地元のスタッフに支えられて実施した

「災害に備える」アウトドア体験キャンプはなんとか実施することが出来ました。

2日目のプログラムは天候悪化のため取り止めとなり事なきを得ましたが、雨天時のプログラムについて十分な検討が必要と考えられる。(今回は台風接近による。)参加者及びスタッフの(主な感想)(ご意見)も評価は多分に甘くなっていますがおおむね好意的な表現が多くどうか進められたのではないかと感じています。この事業は、次年度も実施予定であり、寄せられた(ご意見)を参考にして、より充実したプログラムの展開に向けて検討を進めてまいります。

課題

- 1) 雨天時プログラムを検討する。
- 2) スタッフ間の事前打ち合わせと体験のすり合わせを行う。
- 3) 役割分担を明確にする。
- 4) 炊事用カマドは、水場の付近に設置する。
薪ストーブ・ドラム缶カマド・炊飯用カマド、仕出しも検討する。
- 5) テントサイトの配置について検討する
- 6) 資材の運搬⇒次年度は2 tトラックをレンタルする。
- 7) 事業評価を数値化できるアンケート用紙を検討する。

資料

公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
 - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
 - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
 - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
 - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
 - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
 - 4) その他、本会が特に認めたもの。

【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
 - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
 - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
 - (1) 体裁は、A4版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
 - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は12頁以内（1頁1,600字以内）、実践報告は8頁以内を原則とする。
 - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
 - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
 - (5) 要旨（200語以上300語以内）とキーワード（5語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
 - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例¹⁾」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

(記載例)

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野外一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野外次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野外三郎（2010）野外生活技術、野外一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者 2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
 - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
 - 2) 各査読者による審査結果は、次の 4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
 - A: そのまま掲載可能
 - B: 一部修正すれば掲載可能
 - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
 - D: 掲載不可
 - 3) 2名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
 - 4) 上記 3) に当てはまらない場合のみ、2名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき 3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60 日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計 3 部（オリジナル 1 部、コピー 2 部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに 5,000 円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること

キャンプ研究投稿連絡票

送付日 年 月 日

投稿原稿の種類	<input type="checkbox"/> 研究論文	<input type="checkbox"/> 実践報告
投稿者氏名 ふりがな 氏名 英字表記	姓	名
所属など	_____	
会員番号	—	(団体会員の方は団体会員番号をご記入ください。)
原稿題目 _____ _____		
原稿内訳	原稿本文 _____ 枚	写真 _____ 点
図表 _____ 点		
投稿者連絡先		
〒 _____		
都道 府県		

T e l . _____ F a x . _____		
E-mail _____ @ _____		
※平日昼間に連絡可能な連絡先をご記入ください。		
(勤務先) 会社名 _____ T e l . _____		
(携帯電話) _____		

別刷りの希望 <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり _____ 部 (別途実費)		

※添付書類確認欄 (原稿送付時にチェックしてください)

■ キャンプ研究投稿連絡票

オリジナル原稿 1 部 (プリントアウトしたもの) とコピー 2 部の計 3 部

原稿内の写真と図表

原稿データを保存した各種メディアまたは原稿データを添付したメールの送信

資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する
[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分及び影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学ぶの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウスリフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾～新しいコンセプトを持ったシルバークャンプのこころみ～
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンバク大学の幼児キャンプ ●“共有”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ～馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討～ ●人と人つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通してのひとのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷲敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷲敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発～港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み～ ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効果 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ―事業中止から学ぶこと― ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山 YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入した ASE が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第 10 巻第 3 号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 - 第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き - AOCF 創立 - ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告
[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究 - 花山キャンプを事例として - ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ - 10 年の軌跡 -

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして - 野外活動を通して気づくこと -
[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究 - 身体障害者模擬患者を通して - ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある
[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から -
[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響
[報告] ●第 11 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) -

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 - 第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について - メイン州、キャンプ・オーアトカの場合 - ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟「雪のスゴイ! を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008」 ●ぱるぱるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の (小学 - 大学) 男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発 - プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して - ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告 - 他団体との連携と運営のポイントに着目して - ●『若者自立支援事業「本当にやりたい! ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト - 余島プロジェクト - ●「読書」による観想的キャンプ生活 - 中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に注目して -
[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - キャンプが青少年の成長に及ぼす効果 - ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - プログラムと自然・生活環境に着目して - ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて - 参加者と指導者に着目して -

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識 - 不満足評価の視点に着目して -
[報告] ●キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第 12 回日本キャンプ会議全体報告 - みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) -

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 - 第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割 - 米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム - ●病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプを - 医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み - ●休止スキー場を活用したキャンプの試み - 白山市アドベンチャーキャンプの実践から - ●

指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～ ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者を対象とする女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクセスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13巻第2号(2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(安全管理編)～

■第14巻第1号(2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●

G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALTプログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響

●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー

●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着

目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership

参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカント

リースキーを求めるのか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラム

に関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について

[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果

測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み

●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使った

チームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親

プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

■第14巻第2号(2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻(2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻(2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

◆ CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議(1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強

度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸-東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議(1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について(2)

[報告の部] ●ACAアメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議(1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の葉の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える(Ⅱ)～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議(2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議(2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画と運営—YMCAプロジェクト・SEEDのケース— ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議(2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み—ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプとする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告—アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議(2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Campにおける子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ2003 ●長期キャンプ“わんぱく子ども宿(10泊11日)”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法2 ●多摩川を題材とした環境

教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議（2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャンプの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 ー第9回日本キャンプ会議（2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター）

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004夏の体験学習 夏！君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成（映像発表） ●雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動（私の体験） ●OBSプログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟（ACF）の創立

■第15回Camp Meeting in Japan 2011（2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター）

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念 第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 ー第16回日本キャンプ会議（2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[特別講演] ●「グリーフ（ワーク）×キャンプ」にできること

[口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCAフレンドシップキャンパー子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その1 ●大学生の宿泊研修（野外活動）の現状と課題（第2報）

[ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3)ー4ヶ年調査結果の分析ー ●東日本大震災被災地でのグリーフキャンプの実践報告「岩手しぜんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その2

■Camp Meeting in Japan 2013 ー第17回日本キャンプ会議（2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性ーOutdoor Training Programを導入したTS Campー

●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴ー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーフケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組みー新しい公共型運営についてー国立赤城青少年交流の家の取り組みからー ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～

[ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

※ Camp Meeting in Japan 2006 –第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 –第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

・『キャンプ研究』 各 1,000 円（税・送料込み）

・『日本キャンプ会議抄録集』 各 1,000 円（税・送料込み）

※第 1 回～第 5 回日本キャンプ会議抄録集の在庫はなくなりました。

※『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号の在庫はなくなりました。

編集後記

今回のキャンプ研究第17巻では、研究論文が1題、実践報告が3題掲載されています。

春日さんたちの研究は、雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する研究で、イグルー泊に初参加するキャンパーに対して実施した「宿泊環境についての実態調査」をもとに、イグルー泊の安全性について検討したものです。雪上でのイグルー製作、イグルーの体験宿泊といったプログラムを実施しているキャンプはいくつか見聞きしたことがありますが、イグルーの宿泊環境についての調査は少ないと思います。大変興味深く、また貴重な調査だと思いますので、経験年数でどのような変化が生じるかなど、今後の調査結果にも注目していきたいと思います。

佐藤さんたちの報告は、東日本大震災で被災した子どもたちを対象に、被災地復興支援事業として開催したキャンプの概要、事業評価、地域連携の可能性をとりまとめた報告です。参加者の事業評価は高く、本キャンプの趣旨、目的がとてもよく反映された実践内容となっています。また、本キャンプにおける地域との連携をもとに、地域連携の課題や地域活性への可能性といった点にも言及されています。本報告で紹介されている「人材力」などの視点は、社会全体でキャンプを推進していくためのカギになるのではないのでしょうか。このキャンプがさらに地域の方々との連携を深めつつ、よりよいキャンプ実践となることを大いに期待します。

山形県協会の石井さんたちの実践報告は、父親と子どものキャンプ「パパチルキャンプ」です。先にスタートした母親と子どものキャンプ「ママチルキャンプ」から「パパチルキャンプ」へと至った経緯、キャンプの様子、「ママチルキャンプ」と「パパチルキャンプ」の違いを丁寧にまとめてあります。中でも「ママチル」と「パパチル」の違いは、本事業限定の比較ではあるものの、大変興味深く見ることができます。リピーターも多いため、今後リピーターの要望にどう発展的に対応していくかなど課題はあるようですが、一方でファミリーキャンプにおける母親・父親別の対象プログラムなども計画中のようです。今後のさらなる展開に期待したいと思います。

福島県協会の松前さんの実践報告は、「災害に備える」アウトドア体験キャンプの報告です。主管した福島県キャンプ協会は、2004年に発生した新潟県中越地震を受け、早くから「災害とキャンプ」に着目してきました。その経験を生かし、東日本大震災以降もフォレストパークあだたら財団が実施する「災害対応キャンプ」への協力を定期的に行っていました。このキャンプはこうした経験をもちに考えられた、いわば災害対策プログラムとしての集大成と言えるのではないのでしょうか。東日本大震災から3年の月日が経ちましたが、福島県からの実践報告は力強いメッセージであると同時に、震災を決して風化させないためにもとても大事な実践であると思います。

今回、投稿されました方々に感謝いたしますと共に、読者の皆さまには、個々の実践を記録にまとめ、ぜひその報告をキャンプ研究にいつでもご投稿いただければと思います。

編集担当理事 星野敏男

キャンプ研究

第17巻

2014年3月10日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会

NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



NCAJ
National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217

FAX 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

© 公益社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

キャンプ研究

第17巻
2014年3月発行

ISBN978-4-904008-08-9
C9075 ¥953E



9784904008089



1929075009536

▲研究論文

雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

春日 規克・三原 幹生・加藤 玲香

▲実践報告

南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性

佐藤 冬果・渡邊 仁・向後 佑香

父子キャンプ（パパチルキャンプ）の実践

石井 勝

「災害に備える」野外力をきたえよう

アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

松前 雅明



NCAJ

National Camping Association of Japan

公益社団法人日本キャンプ協会

定価 1,000円(本体953円)